

## 第 130 スタジオ夜話

### サウンドドラマ制作 演出と技術

#### ☆ はじめに

春の訪れ、季節もいよいよ春らしく全国各地から「桜咲く！」春の便りがTVなどから届くようになりました。さて読者皆様は「サクラサク」という文面の電報というものをご存じでしょうか？

今でも電報という通信手段は残っていませんがかつて電話が発達していなかった時代、もちろんメールなど想像もできなかった時代のことです。人々にとってはこの電報が最速の通信手段でした。送り主が郵便局に出向き専用の用紙に文面を書き局員に渡すと、いわゆる「モールス符号」を使った通信で送り先の宛名に近い郵便局へ文書を送り、そこの局員が大急ぎで宛名住所まで文章を配達するというもの、文章はカタカナのみで料金も文字数に応じて課金されるものでした。

「サクラサク」は大学の入学試験合格を知らせる定型通信文です。今では信じられないことですが入学試験当日会場の出口には代理で合格発表を確認する業者の人が数多く居て電報を請負う営業勧誘をしていました。有名大学になるほどその数が多い傾向にありました。今時はウェブサイトで確認できますが、今も合格発表の大学構内掲示板発表はその名残として残っているのも面白く、受験番号を背景に記念撮影する受験生やその親？の姿もまだ若干見られます。

地方出身の同級生の中には50年以上前の合格電報「サクラサク」を記念に保存している者もいます。今でも電報はありますがとてもきれいな用紙に文面が記載された記念的な要素の強いものになっています。結婚祝いや出産などの祝電が中心です。若干通信料としてはお高いようですが手軽に送れる？記念の現物アリの有料メールみたいなもので、きれいな色紙的なものが手元に届くことで利用する人もそれなりにいま

す。リアルなのが面白いのでしょうか。この申し込みは現在スマホから行うことが多いのです。1600円ぐらい課金されます。スマホから送る電報、はたしてこれはナンセンス（死語）なのでしょう（英語ではナンセンス普通に使えます。nonsense）。読者皆様「桜咲く」春の訪れをどうぞ満喫ください。

さて今回のスタジオ夜話、前回に引き続き「サウンドドラマ制作・演出と技術」のお話です。聴取環境について前回お話ししましたが劇的に変化したその聴取環境で、今日サウンドドラマを提供する興味ある手段とはです。背景などを紹介しながらその制作についてお話します。お付き合いよろしくお願いたします。

#### ☆ 聴取環境

##### 「具体的な聴取環境」を理解する II

前回は「聴取環境を理解すること」「身体を揺るがす大音量・・・ありえません！」でした。もちろん極一部のオーディオマニアや、また大型システムを否定する訳ではありません。大切なものは身体を揺るがす大音量に聴こえる「～のような」迫力ある音を制作するということです。また筆者はヘッドホン聴取環境を意識した制作技法を日頃から推奨しています。ヘッドホン聴取にはスピーカー再生とは違った様々な興味ある点があることもその理由の一つになっています。確かにヘッドホン再生にはいくつかの問題点が存在することも事実ですが、今日ヘッドホン聴取の問題点云々することよりもむしろスピーカー再生での問題点を云々したほうがグローバルスタンダード？的発想ではないかと筆者は思います。

筆者は恵まれた住環境（山小屋）にいますので大型スピーカー再生も可能ですが最近ではもっぱらヘッドホンを活用しているのが

現状です。

今多くのリスナーは筆者のようにヘッドホン利用で多くのコンテンツを享受しています。しかしながらコンテンツ制作サイドの大手制作スタジオではスピーカー再生中心のシステムになっています。失礼な言い方をすれば筆者と同年代のジジイがオーディオ装置を自慢しているようにも思いません。

現在多くのコンテンツ制作アーティストが自宅の小型システムで優れた作品を世に提供しています。作品のクオリティーのみならず音自体のクオリティーも確かなものが数多く見受けられます。勿論小型システムのみならずヘッドホン中心での制作、試聴を繰り返し創ったコンテンツも多数あります。こうした状況に加え現在の具体的な聴取環境を意識しながら制作することが望まれるのです。

#### ☆ 聴取環境

##### 「具体的な聴取環境」を理解する III

前回はここからドラマ空間を創る音「背景音」と「環境音」とお話は進みましたが今回は具体的な聴取環境を理解するためにもう少しお話をします。ヘッドホン聴取のお話です。今までヘッドホン聴取が主流だと筆者はお話してきました。制作環境もそこへ向かう必要があるとお話しています。これは時代の推移を振り返れば必然であることを理解してください。制作本題に移る前にもう一度確認しておきましょう。

#### 1) ヘッドホン聴取の歴史 ?

今更ですがヘッドホン聴取の歴史を簡単に振り返ってみます。所説様々ですがヘッドホンは通信用に開発されました。電話交換手用というのが定説です。もちろん交換手だけがヘッドホンを使っていたわけでは



スマホの聴取は、ヘッドホン（イヤフォン）が多いようだ。出始めは有線のもの主流だったが、今では圧倒的に Bluetooth 仕様のものが多く、アクティブノイズキャンセリング機能も充実。また空間オーディオの配信も盛んになり、耳からうどんを垂らしているような光景（あるドラマでの不適切な表現）はよく見かける事となった。(mo)

ありません。無線通信にも使われていたことは想像の範囲です。

1880年代のことです。重い片耳タイプのものであったと学習した記憶があります。一方エジソンの蓄音機は1887年に発明されたと言われていて、そして1927年にはこの蓄音機用レコードがマイクロフォンにより記録できるようになります。スピーカー再生は1930年代に入り蓄音機がラジオと合体することによってできるようになりました。これは筆者の想像ですが1880年代に電話交換用のヘッドホンが出来ていた。そしてマイクロフォンは1876年にその原型が完成しています。つまり総合的に判断すればマイクロフォン収録、ヘッドホン再生の歴史は1880年代初頭にはその概念や基本は完成していたことが解ります。

## 2) ヘッドホン聴取の歴史 ?

ここでは専門的な歴史の話はせずあくまでもサウンドドラマ制作のための予備知識程度にザックとお話してゆきます。

ヘッドホン聴取の歴史、一挙に話は進みます。戦前戦後のラジオ聴取の話飛ばし、高度成長時代に進みます（注、戦前戦後、

この戦争は1939年（昭和14年）9月1日に始まった第二次世界大戦のこと、最近はいつの？どこの国の？なんて若者もいません。ので注です）。

高度成長時代世の中は好景気となり家庭でも音楽を楽しむようになってきます。「戦前戦後の歌謡曲や進駐軍の音楽」？の話ではありません。家庭用オーディオ機器の普及とレコード鑑賞のお話です。各家庭にオーディオ機器が購入され様々なジャンルの音楽が聴かれるようになってきたのです。

一体型の電蓄からセパレートステレオ、コンポスタイルの物へと発展して行きます。（セパレートステレオは死語）性能も著しく進化しました。当時団地6畳間にもステレオ装置が鎮座していました。しかし残念ながら日本の住宅事情から大音量は近所迷惑。そこで普及したのがヘッドホンです。ヘッドホン聴取の大きな第一歩は日本の住宅事情が発端です。高音質で没入感に優れたヘッドホンはオーディオセットには欠かせないオーディオツールとなりました。（大きめの密閉方式でユニット口径も大きく特性も優れていて筆者は現在でも当時物をよく使います。）そして時代はさらに進みます。

1979年（昭和54年）ご存じ？ウォークマンの登場です。音楽が自由に外に持ち出せるようになりました。媒体はカセットテープです。当然聴取にあたってはヘッドホンが使用されます。ここから小型軽量で性能の良いヘッドホンの開発普及が一挙に進みます。現在のスマホとヘッドホンというスタイルの始まりでした。

スマホの普及率は2022年時点では調査人口に対して94%です。スマホ所有者すべてがヘッドホン聴取でオーディオコンテンツを聴取するとは限りませんがその様相は想像の範囲内です。こうした現状をふまえて業界の皆様、スピーカー再生も否定はしませんがそろそろヘッドホン再生を前提にコンテンツ制作の方向を検討してみたいかがでしょうか。（ヘッドホン聴取の歴史？は詳しくはネットなどでググってください。）

## ☆ サウンドドラマ制作 演出と技術

お話は本題「サウンドドラマ制作・演出と技術」に戻ります。聴取環境を考えてヘッドホン聴取を前提にスピーカー聴取を参考に比較しながらお話を進めます。

さてコンテンツ再生ですがサウンドドラマに限らず音楽でもスピーカー聴取環境は一般的にリビングにあるTVやDVD再生が可能な装置や小型コンポ、そしてカーオーディオになります。一方ヘッドホン再生は環境を選びません。またコンテンツへの没入感ヘッドホンに分があると言えるでしょう。もちろん車などの運転環境ではヘッドホンは事故の基となりスピーカー再生をお勧めします。つまりスピーカー再生はヘッドホンに比較すれば「～しながら」が適している方法と言えるでしょう。音楽は「～しながら」でも十分楽しめるコンテンツで

# スタジオ夜話

す。(真剣に聴くという選択肢もあります)。一方サウンドドラマは真剣に聴かなくては内容も深く理解することは難しい要素が多くあります。昨今小説などの朗読をコンテンツ配信している広告をみますが、基本「～しながら」のようです。オリジナルの行間から感じるものやテーマを考えると「～しながら」で良いのでしょうか(それもアリ?) 筆者はかつて仲代達矢さんの朗読で芥川龍之介の蜘蛛の糸をCD収録したことがあります。お話のテーマなどはよく知られた内容なので「～しながら」でも理解はできます。

この時感じたことはイントネーションや活舌の良さでは無く、「朗読は味わい」が最も重要だと痛感しました。朗読での個性ある役者さんの味わいを聴き取る「没入感」スピーカー再生のコンテンツが良いのか、ヘッドホン再生の方が良いのか、またサウンドドラマ制作に置いても媒体の提供方法など意識して制作者は制作しなくてはなりません。

リスナーの聴く意識の問題もありますが、音の演出、没入感を含め、ヘッドホン再生を前提としてサウンドドラマを制作する。筆者はそれが最適と考えています。

## ☆ ドラマ空間を創る音 II

昔、昔、コンテンツ制作者のバイブルとして出版：石崎書店、並河亮 著「放送の台本と演出」という書籍がありました。並河亮 師は文学博士であり小泉八雲：Lafcadio Hearn、1850—1904 の研究では世界的な権威を持つ人で放送局 NHK 国際部、TBS、毎日放送、日本大学教授などに勤務するかたわらラジオ、TV 関連の書籍やドラマ、ドキュメンタリーなどの著作も数多くその他文芸・美術・ジャズ評論とスーパーマンのように活躍された人物でした。筆者の恩師でもあります。

並河 師はよく酒の席で「ドラマはまず作品自体が面白いことが重要」(面白いには様々な意味があります。ご注意ください!)そして媒体(当時は放送)に創り上げるときは「その媒体の特性を理解して制作」に臨むことが重要であると言っていました。

サウンドドラマは音という媒体をもって表現するものでありその音の中には台詞などの意味をもつもの、また意味を持つ効果音や音楽、など構成要素は様々です。そして提供するコンテンツはヘッドホンで聞く音という媒体で表現するのかスピーカーで再生する音で表現するのかは重要な選択肢の一つになります。

前回サウンドドラマ制作では様々な「ドラマ音」を制作して行きます。「ドラマ音」とは創意工夫によって創られた「ドラマのシュチエーション上の音」のこと(筆者)。この「ドラマ音」は、とお話しました。

今回これに加えてヘッドホンで聞く音で創る、あるいはスピーカー再生なのかも考慮することも必要であるとの理解が得られたと思います。そうした中このドラマ音が創り出すドラマ空間は再生方法によって大きな違いがあることに気づかされます。

## ☆ ドラマ空間を創る音 III

スピーカー聴取とヘッドホン聴取の大きな違いを通常のステレオソースを例にお話します。スピーカー再生の場合、ドラマ空間は通常のリスニングスタイルでは(リスナー正面に適度な距離を置いて左右スピーカーを配置したスタイル)リスナー前方左右にドラマ空間が展開します。

ヘッドホン再生ではドラマ空間はリスナーの左右両耳と頭内に展開します。

この違いは演出的に大変大きな違いだと理解してください。(次回以降具体的にお話します。)今回一例として：スピーカー再生

ではリスナーから適度な距離にスピーカーを配置しているため独り言とナレーションの区別は ON/OFF 感などで調整します。

定位位置もあるかもしれません。またスピーカー再生では OFF 感は現実的な? 表現がしやすいのですがヘッドホン再生では音としての OFF 感は現実的? には不可能で、音を聞いて意味理解する OFF 感です。つまり頭内定位なので小さな OFF 的音だと認識して理解するというものです。

一方リスナー自身が登場人物の立場に立ったときの独り言などはリスナー前方のスピーカーから聞こえるよりも頭内定位のほうが効果は優れているといったことがあります。また特記すべきこととしてヘッドホン聴取を前提とすればバイノーラル手法が考えられます。バイノーラルはバーチャルにヘッドホンによる頭外定位を可能とする方法でサウンドドラマ制作に大きく貢献できる手法です。

今日ではバイノーラルはダミーヘッドマイクロフォンでの収録に加え、360° 全方位でのエンコーダーによるシュミレーション制作が誰でも使える環境となっています。

## 次回は

サウンドドラマ制作・演出と技術、今回の続きです。「ドラマ空間を創る音 III」の内容を掘り下げてお話を続けます。演出的頭内定位やバイノーラルの頭外定位。ヘッドホン聴取はサウンドドラマを提供するための興味ある手段です。背景なども紹介しながら具体的制作についてお話します。

暖かい春が訪れ新年度までもあと少しです。花粉症や寒暖差などに気を付けてお身体を大切にお過ごしください。

— 森田 雅行 —